

## 「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学研究科 1年 岡田眞太郎

今回のフィリピン研修のテーマは「フィリピンから日本への移民」であるが、この問題に関わるアクターの多さ、その関係の複雑さに何より驚かされた1週間だった。日本・フィリピン両国の政府機関をはじめとして、労働力が欲しい日本の企業、そこを斡旋する両国の民間団体とその内外部の組織構造、そして実際に移住するフィリピン人とその家族。私たちが日本で学習支援を通して関わる JFC (Japanese-Filipino Children) が日本に来る背後には、様々な利害関係者が存在するという視覚的に理解することができたのは大きな経験だといえる。

JFC が抱える問題を考える上では、上記のような、日本に来るまでの関係者だけではなく、来日後（またはその後フィリピンに帰国後）に関わるアクターも重要になる。今回の研修ではそうした人たちからも話を聞くことができた。JFC やその母親たちへの支援を行う NGO 「DAWN」 「Maligaya House」はその代表的存在だろう。そして、個人的な関心の強さも、来日後の移民をサポートするこうした団体にある。

というのも、私の修士課程における研究関心は「日本の地域福祉・地域自治」であるが、JFC のような移民もまた日本における地域社会の一員であり、その支援枠組みの中に上記の NGO も位置づけることができる。今回の研修のなかで地域福祉を支える NGO の話を聞いたことで、今まで目を向けきれていなかった移民という存在を自分の研究対象にも含めなければと強く思い直す良い機会になった。行政区域を超えて支援を行う NGO は、日本の地域福祉の概念を拡げる興味深いアクターなのかもしれない。

そして、私たち学生もまた、日本では学習支援者として日本在住の JFC を支える一つのアクターであるが、今回の研修ではフィリピンに在住する JFC に会う機会にも多く恵まれた。日本で支援しているときと同様に、フィリピンで JFC と触れ合っと思うのは、私たち一般的な日本人との理不尽なまでの差である。そもそも経済的な国力の差が日本とフィリピン両国の間には存在する上、JFC は父親がいないなど不完全な家族の形を有する場合は多いのでフィリピン国内においても恵まれない状況にある。この現実を目の前にして、ときどき自分がどのように彼らと接すればいいのか分からなくなる。私たちの行動は彼らの支えになっているのだろうか、彼らは私たちをどう思っているのだろうか、などといった悩みが絶えない。

その一方で、手を触れあって一緒に遊んでいるときには、そんな迷いも忘れていて、彼らと同じ時間を共有していることをただただ楽しんでいる。振り返って考えると、私はその空間にこそ日本社会における移民への希望の光を感じる。

日本社会に移民が増えてきているとはいえ、実際に触れ合う機会というのは多くはない。新聞やテレビといったマスメディアや、街中で見かけるといった程度が、日本人の移民を知る機会の大半ではないだろうか。しかし、身近に触れ合うことではじめて、移民に対する自分の意見を持つことができ、ときには、私がフィリピンや日本で JFC と遊んだときのように、互いに分かり合える瞬間に巡り合えるかもしれない。劇的に制度を変革したり、社会全体での意識を変えることは難しいが、個人の考えが変わることは容易にあり得る。その個人の変化を積み重ねていくという方法で、JFC を含めた移民たちが日本でよりよく暮らしていけるようになれば、と研修を通じた体験から私は思う。